

# 小林仙三著『山陵取調巡廻日記』の各日条の年・月の確定

外 池 昇

## はじめに

『山陵取調巡廻日記』（全四冊）（以下『日記』という）は、宇都宮戸田藩によって企図・遂行された「文久の修陵」に現場で携わった小林仙三の日記である。原本の所在は不明ながら、写本が東京大学史料編纂所に史談会採集史料として所蔵されている他、京都大学付属図書館にも同題・同内容の写本が所蔵されている。両本とも成立年代は不明である。本稿では、京都大学付属図書館所蔵本は東京大学史料編纂所所蔵本に依拠したものと考えられるので、東京大学史料編纂所所蔵本に拠って『日記』について検討することにする。

—小林仙三—

『日記』の著者小林仙三の履歴の詳細は明らかではないが、『山陵修補始末稿』（以下『始末稿』という）・『文久度山陵修補綱要』（以下『綱要』という）（ともに宮内庁書陵部所蔵）によって、小林仙三と「文久の修陵」との関わりについてはある程度知ることができる。つまり次の通りである。

- (1) 文久二年九月二十六日に江戸を発って京都に向かった戸田忠至（間瀬和三郎）一行に、小林仙三等は「本馬一匹」をあてがわれて「小役人出京中徒格御营造下役」として加わった。（『始末稿』・『綱要』）
- (2) 文久三年十二月に、御陵御用を勤めたということで小林仙三等は拝領御手当て米の内一ヶ年米七俵宛が下された。（『始末稿』・『綱要』）

(3) 元治元年二月二日の御達により、小林仙三等に神武天皇御陵普請につき白銀一枚宛が下された。〔『始末稿』・『綱要』〕

(4) 慶応元年十二月に、山陵修補の者共の一人として小林仙三等は朝廷から白銀若干を賜った。〔『綱要』〕

(5) 慶応二年十一月四日に堺奉行より和泉三陵（仁徳天皇陵・反正天皇陵・履中天皇陵）が引き渡されるのについて、小林仙三は御營造奉行添役として松井良吉とともに請け取りのため出張した。〔『綱要』〕

(6) 慶応二年十二月二十七・二十八・二十九日に、大和・和泉・摂津・河内・丹波・山城国の御陵御取締長・守戸が戸田忠至から達せられたのに際して、小林仙三は松井良吉とともに御營造奉行添役であった。〔『綱要』〕

(7) 慶応三年正月四日に戸田忠至が泉涌寺地内に孝明天皇陵の御場所見分のため出向いたのに際し、小林仙三は御營造方として同行した。〔『綱要』〕

このように、小林仙三は「文久の修陵」の実務面の重要な局面にしばしば名前をみせるのである。

また天皇陵の普請について個別にみると、右にみた神武天皇陵のほか、およそ元治元年九月から慶応元年二月にかけてなされた崇神天皇陵・景行天皇陵・舒明天皇陵・崇峻天皇陵・後醍醐天皇陵等の修補と、およそ文久三年八月から元治元年十二月にかけてなされた天智天皇陵・醍醐天皇陵・朱雀天皇陵・後二条天皇陵・後一条天皇陵・同御火所・陽成天皇陵・花園天皇陵・高倉天皇陵・六条天皇陵・御白河天皇陵の修補に、小林仙三が山陵御修補掛として携わったことが知られる。<sup>①</sup>〔『始末稿』〕

「文久の修陵」後の小林仙三の足跡を示す史料は極めて乏しいが、『始末稿』に収められた明治三十年十月二十九日の法律第五十号「家禄及賞典禄処分方」に基づく「賞典禄御給典請願書」の雛型に、小林仙三の名がみえるのが注目される。そこには「山陵修造成功ノ賞典請求願人人名」として挙げられた人名のなかに「旧曾我野藩士五石小林仙三」とあり、小林仙三が明治三年三月から同四年七月にかけて存在した曾我野藩の藩士であって、かつ少なくとも明治三十年十月までは在世していたことがわかる。

―『山陵取調巡廻日記』―

『日記』の最大の特徴は、なんといっても「文久の修陵」の具体的な局面が詳細に記されていることである。とりわけ現地における陵墓の管理人である長・守戸の配置の実態、また讃岐にある崇徳天皇陵の修補の過程については、他に類似の史料を求め得ない。

ところが「文久の修陵」をめぐる研究のなかでは、これまで『日記』が取り上げられる機会は全くなかった。それは、歴史学の視点による「文久の修陵」研究の関心が、専らその政治的意義をめぐる議論に集中し、「文久の修陵」の過程の詳細な検討にまで関心が及ばなかったことによるものである。今後研究の進展に伴って、『日記』が「文久の修陵」の研究の中核的な史料として注目を集めるものと思われる。

しかし実際に『日記』を繙いてみると、「文久の修陵」研究のために『日記』が活用されるには大きな障碍があることに気づく。つまり『日記』の各日条には日付の記載はあるものの、年・月の記載は多く欠けているのである。それも各日条の順序が規則的であれば大きな問題はないが、しばしば各日条の順序も大きく乱れているのである。いくら日付が明確であっても、年・月が確定できなければ、「文久の修陵」研究に『日記』が用いられる機会は極めて限定されざるを得ない。

本稿ではこの『日記』の各日条の年・月の確定の問題を取り上げ、『日記』が「文久の修陵」研究に生かされるための基礎作業とすることにした。

―『日記』の構成―

『日記』の日付の表記を表にまとめると、表Ⅰ『山陵取調巡廻日記』の日付の表記』の通りである。同表に明らかな通り、東京大学史料編纂所蔵本には外題に年の表記がある。つまり第一冊には「慶応二年」、第二冊には「慶応二年全四年」、第三・四冊には「慶応四年」とある。一見するとこの年の表記を抛り所に各日条の年・月は容易に確定されそうであるが、以下の論述によって、この外題のみによって各日条の年・月を確定できないことが明らかである。なお、この東京大学史料編纂所蔵本の外題が何に拠ったのかは不明である。

表I『山陵取調巡廻日記』の日付の表記」から、各日条が連続する部分と、それが途切れる箇所とがあることがわかる。連続する部分は、その各日条の総ての年・月が特定されなくても、その中のある程度の条の年・月が特定されれば、全体としてその連続する部分の年・月が特定できることになる。

年・月の特定のための方法としては、『日記』以外の史料との対比の他に、『日記』に収載された文書の年代と対照することも有効である。『日記』には、「文久の修陵」に際して天皇陵周辺の村に宛てられた文書が多数収載されているが、『日記』が日を追って順に書き継がれたものならば、そこに載せられた文書の年・月・日がその日の条以降になることはあり得ない。これらの文書は、表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覧』の通りである。

また、月の大小を『日記』の内容と対照することも有効である。ただし、『日記』の記載が三十日までである場合にはその月を大の月と判断することはできても、『日記』に二十九日までの記載しかない場合は、三十日の記載が欠けているだけで実際には小の月ではなく大の月であることもあり得るのである。

このような視点からすると、『日記』の各日条は次のA～Fに区分されよう。番号は表I『山陵取調巡廻日記』の日付の表記』の番号である。

1	42	A
43	55	B
56	83	C
84	.....	D
85	94	E
〔錯綜部分〕		
95	108	F
109	261	G
262	288	H

この内Dは一日のみの記述、A・Bはそれぞれの範囲で毎日の記述で、それぞれ連続する部分とみることができ<sup>(2)</sup>。これに対してC・Fはそれぞれの中で同一日の条が繰り返されている場合がみられ(C79「同八日」・80「同八日」、H278「同二日」・279「同二日」、またEは欠落している日の条が多くみられるが、ここでは取り敢えず『日記』全体をA・B・C・D・E・〔錯綜部分〕・F・G・Hに区分して議論を進めることにしたい。

ただし『日記』の記述は全体にわたって大変入り組んだものである。『日記』は、書き継がれた当日のできごとを記述する他にも、右にも述べたように諸種の文書が各所に挿入されている。すなわち、どこからどこまでが何日の条かを必ずしも明確にできない箇所がしばしばある。表I『山陵取調巡廻日記』の日付の表記の「七月五日」条94と「六月二日」条95の間に〔錯綜部分〕とあるのは、その例の一つである。同表には詳細に指摘できなかったものの、同様の例は他にもみられる。

本稿で各日条の年・月を確定しようとする際に、このような『日記』の特性が大きな妨げとなる。これは、果して小林仙三がどのように『日記』を著したのかにもかわる問題であるが、本稿では取り敢えず『日記』全体を各日条に区分することを前提として、考察を進めることにしたい。

## 『日記』の各日条の年・月・日の確定

—A—

A(1~42)は、「十月中」の「三日」条1から、「十一月中」の「同十四日」条42までの計四十二日間<sup>(3)</sup>にわたって、総ての日付の条が記されている。東京大学史料編纂所蔵本では第一冊の全部に対応し、その外題には「慶応二年」とある。

そして表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覧からわかるように、Aには、「十月中」の「同八日」条6に三点、同じく「同九日」条7に三点、「十一月中」の「同四日」条32に一点、同じく「同五日」条33に一点、同じく「同十一日」条39に一点の計九点の文書が収載されている。

このうち八点の文書の年代が明らかであり、Aの年・月の特定のための手掛かりとして有効である。

Aに収載されている文書の年代に注目すると、表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覽にみえる通り、「十月中」の「同八日」条6のaには「慶応二年寅年」、bには「慶応二寅年十月」、cには「慶応二寅年十月」、同じく「同九日」条7のaには「寅十月」、bには「寅十月」、cには「丑七月」、「十一月中」の「同五日」条33のaには「慶応二年寅年十一月」、同じく「同十一日」条39には「慶応二年十一月」とある。これからすると、Aは慶応元年以前ではあり得ないこと、また恐らくは収載された文書の年代と合致する慶応二年であろうということが考えられる。

このことは、「十月中」の記載が「晦日」(三十日)まであり、慶応二年十月が大の月であることと矛盾しない。

右によって、Aが慶応二年十月三日から同年十一月十四日までのものであることがわかる。

—B—

B(43〜55)は、「同七日」条43から「同十九日」条55までの計十三日間にわたって、総ての日付の条が記されている。東京大学史料編纂所蔵本では第二冊の一部に対応し、その外題には「慶応二年全四年」とある。

そして表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覽からわかるようにBには「同十日」条46に一点、「同十九日」条55に一点の計二点の文書が収載されているが、いずれの文書にも年代が欠けており、Bの年・月を特定するための手掛かりとはならない。

そこでBの「同七日」条43・「同八日」条44・「同九日」条45・「同十日」条46・「同十一日」条47に注目すると、そこには、「御勅使六条中納言<sup>(有容)</sup>」の「神武帝御陵」への「御参向」についての記述がある。

この内「同七日」条43には、「一慶応三卯年三月十一日 神武帝御陵へ 御勅使六条中納言殿御参向ニ付」とあり、この一連の記述が慶応三年のものであることが知られる。この神武天皇陵への勅使「六条中納言」の参向をめぐるのは、『明治天皇紀』の同年三月八日条に「神武天皇山陵奉幣使発遣並使定陣の儀あり、上卿は権中納言六条有容、執筆は参議梅溪通善にして、辨は蔵人権右中辨勘解由小路資生、奉行は蔵人頭左中辨甘露寺勝長奉仕す、乃ち有容を奉幣使と定め、発遣せしめらる、有容本日発途、十一日奉幣を畢る<sup>(3)</sup>」とある。そしてこれは『日記』の「同十一日」条47の、「一御勅使

辰ノ半刻御触出ニテ 神武帝陵へ御参勤相済」との記述と符合する。

右によって、Bが慶応三年三月七日から十九日までのものであることがわかる。

—C—

C(56、83)は、「同十五日」条56から「十二月中」の「同十一日」条83までの二十八日間<sup>(4)</sup>にわたって記されているが、「十二月中」の「同八日」条は二箇所ある(79・80)。東京大学史料編纂所蔵本では第二冊の一部に対応し、その外題には「慶応二年全四年」とある。

そして表II『山陵取調巡廻日記』所載文書一覧<sup>(5)</sup>からわかるように、Cには「同十五日」条56に三点、「同十九日」条60に四点、「同廿日」条61に一点、「十二月中」の「同十一日」条83に九点の計十七点の文書が収載されている。このうち、九点の文書の年代が明らかであり、Cの年・月の特定に有効である。

Cに収載されている文書の年代に注目すると、表II『山陵取調巡廻日記』所載文書一覧<sup>(5)</sup>にみえる通り、「同十五日」条56のaには「慶応二寅年十一月」、bには「慶応二寅年十一月」、cには「慶応二寅年十一月十三日」、「同十九日」条60のaには「慶応二寅年十一月」、bには「慶応二寅年十一月」、cには「慶応二寅年十一月十八日」、dには「慶応二寅年十一月」、「同廿日」条61のaには「慶応二年寅十一月」、「十二月中」の「同十一日」条83のaには「慶応二年寅十二月十一日」とある。

「十二月中」の「同十一日」条83所載のe「規定書」は、長・守戸の勤務の内容の規定であるが、『日記』には年・月・日が欠けている。ところが、清寧天皇陵をめぐる管理の実態を記した「永代録必用」にはほぼ同文の「御条目」が載せられており、その末尾には「慶応二寅年十二月廿八日」とある。「規定書」「御条目」の類が達せられてから日記・御用留の類に載せられるまでには、いくらかの日のずれはあるであろうが、この「規定書」の年・月はおよそ慶応二年十二月とすることができる。

「同廿七日」条68には「松井氏自分長・守戸懸合手紙之事」とあるが、これは、「永代録必用」に収められた「慶応二寅十一月廿七日ニ、支配地頭江再応御達し之御状之写扣」(戸田大和守内松井良吉・小林仙三↓地頭役人<sup>(5)</sup>)のことである

と思われる。つまりそこには長・守戸の人選について「猶又此頃中改而今一応御打合、早々人撰名前取調之上、差出候様被 仰出候ニ付、即人撰及御掛合候様、御差支之有無御報有之度奉存候」とある。だとすれば、この「同廿七日」条68は、慶応二年十一月とすることができ。

このことは、Cの部分の内「十二月中」の直前の部分が大の月であること、そして慶応二年十一月が大の月あることと矛盾しない。

右によって、Cは慶応二年十一月十五日から十二月十一日までのものであることがわかる。

—D—

D (84) は、「同廿日」条84の一日のみである。東京大学史料編纂所所蔵本では第二冊の一部に対応し、その外題には「慶応二年全四年」とある。

この「同廿日」条84の記述は、「神武帝御勅使」に関するものであるが、勅使の姓名も記されておらず、年・月を特定する手掛かりに欠ける。

そして、このDの部分には文書は収載されていない。

—E—

Eの部分(85～94)は、「六月四日」条85から、「七月五日」条94にわたって記されているが、「六月四日」条85と「六月六日」条86の間、「六月六日」条86と「六月十二日」条87の間、「六月十二日」条87と「六月十七日」条88の間、「六月十七日」条88と「六月廿日」条89の間、「六月廿日」条89と「六月廿九日」条90の間、「六月廿八日」条92と「七月四日」条93の間には記載がない。また「六月廿日」条89から「七月四日」条93までは日付の順序が前後している。東京大学史料編纂所所蔵本では第三冊の一部に対応し、外題には「慶応四年」とある。

そして表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覧からわかるように、Eには「六月四日」条85に一点、「七月五日」条94に一点の計二点の文書が収載されているが、いずれも年・月を欠きEの年・月の特定のために有効でない。今後の精査によっては、Eの年・月の特定のための材料が『日記』の記載に認められない訳ではないと思われるが、本稿で



はEを年・月末詳とすることにする。

—F—

F (95↘108) は、「同五日」条95から「同十七日」条108まで記されている。「同十四日」条107と「同十七日」条108の間は欠落している。東京大学史料編纂所蔵本では第三冊の一部に対応し、外題には「慶応四年」とある。

そして表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覽からわかるように、Fには「三日」条96に三点、「同六日」条99に四点、「同八日」条101に二点、「同九日」条102に七点、「同十一日」条104に一点、「同十三日」条106に三点、「同十四日」条107に一点、「同十七日」条108に一点の計二十二点の文書が収載されている。

このうち十八点の文書の年代が明らかであり、Fの年・月の特定に有効である。

Fに収載されている文書の年代に注目すると、表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覽にみえる通り、「三日」条96のaに「慶応四辰年六月三日」、cに「辰五月」、「同六日」条99のaに「慶応四年辰五月十九日」、bに「慶応四年辰六月六日」、cに「辰六月六日」、dに「慶応四辰六月六日」、「同八日」条101のaに「慶応四年辰五月」、bに「慶応四年六月」、「同九日」条102のaに「慶応四年辰六月十日」、bに「慶応四戊辰年六月」、eに「慶応四辰年五月廿五日」、fに「慶応四年六月十一日」、gに「慶応四年辰六月十一日」、「同十一日」条104のaに「慶応四年六月十一日」、「同十三日」条106のaに「慶応辰年六月」、bに「慶応四年辰五月晦日」、「同十四日」条107のaに「辰六月」、「同十七日」条108のaに「慶応四辰年六月」とある。これからすると、Eは慶応三年以前ではあり得ないこと、そして恐らくは収載された文書の多くの年・月と合致する明治元年六月であろうということが考えられる。だとすればFは明治元年六月五日から同十七日にかけてのものである。ただし「同九日」条99のaの年代は「慶応四年辰六月十日」であり、Eを明治元年六月とするとこの「同九日」条99は明治元年六月九日であって、矛盾をきたす。これは、『日記』が著されるに際しての前後の錯綜とみなす他はないであろう。

—G—

G (109↘261) は、「慶応四年辰七月廿五日」条109から「十二月中」の「同廿九日」条261にわたって記されている。東京

大学史料編纂所蔵本では第三冊の一部と第四冊の一部に対応し、第三・四冊の外題には「慶応四年」とある。

Gには文書が収載されていないが、『日記』の記述に年・月の特定に有効なものである。

「八月」の「廿七日」条<sup>140</sup>・「同廿八日」条<sup>141</sup>・「同廿九日」条<sup>142</sup>は、「泉涌寺山科 天智天皇御陵 孝明天皇御陵 御幸被 仰出候事」(「廿七日」条<sup>140</sup>)について述べられている。「同廿九日」条<sup>142</sup>には、「卯之刻御出輦(略)天智天皇御陵御拝(略)泉涌寺御殿ニ御入御(略)孝明天皇御陵御拝」とある。

この天智天皇陵・泉涌寺・孝明天皇陵「御幸」は、『明治天皇紀』明治元年八月二十九日条の「山科陵及び後月輪東山陵親謁のため、辰の刻惹華輦に御して御出門<sup>6</sup>」との記述に符合する。つまり、ここにみえる「御幸」は明治元年八月二十九日の明治天皇によるものであったことが明らかである。

Gの「八月」の「同三十日」条<sup>143</sup>には、「今辰刻 御出輦ニテ 主上荒神口橋東川端繰練場へ御神兵繰練 天覧之事」とある。この「天覧」は、『明治天皇紀』明治元年八月三十日条に「辰の半刻御出門、河東繰練場に幸す<sup>7</sup>」とあるのと一致する。つまり、この「天覧」は明治元年八月十日の明治天皇によるものであったことが明らかである。

またGの「九月中」の「同五日」条<sup>148</sup>には「御勅使中院殿・三条西殿今晩伏見泊リニテ御帰京、淀川筋伏見入口ニテ川中ニテ行違候事」とある。この「御勅使中院殿・三条西殿」は、『明治天皇紀』明治元年八月二十六日条に「権中納言中院通富を以て勅使と為し、左近衛権少将三条西公允と副使として讃岐国に遣はし、白峯山陵に崇徳天皇の神霊を奉迎せしめ<sup>8</sup>」とみえる、讃岐国の崇徳天皇陵に遣わされた勅使中院通富と同じく副使三条西公允の帰京のことと考えられる。つまり、「九月中」の「同五日」条<sup>148</sup>は明治元年のことである。

そしてGの「十二月中」の「同廿四日」条<sup>256</sup>は、「孝明天皇御祭典」について記す中で「一御勅使醍醐大納言殿」「一大宮御所御参拜之事」と記している。これは『明治天皇紀』明治元年十二月二十三日条に「翌二十四日、権大納言醍醐忠順を勅使として復び山陵に参向せしむ、(略)同日卯の刻、皇太后、堂上四人及び女房等を従へて御出門、泉山門に行啓あり<sup>9</sup>」とあるのと合致する。つまり「十二月中」の「同廿四日」条<sup>256</sup>は明治元年のことである。

そしてこのことは、明治元年の八月・十月・十一月が大の月であり、『日記』の「八月」・「十月中」・「十一月中」

の記述が三十日（晦日）までであることと矛盾しない。

右により、Gは明治元年七月二十五日から十二月二十九日のものであることがわかる。

—H—

H（262～288）は、「慶応三丁卯年十一月」の「同十六日」条262から「十二月中」の「同十一日」条288までの計二十七日間にわたって記されている。東京大学史料編纂所蔵本では第三冊の一部に対応し、外題には「慶応四年」とあるものの、Hの部分は「慶応三丁卯年十一月」されており年・月の上で区切られている。

そして表II『山陵巡廻取調日記』収載文書一覽から分かるように、Hには「慶応丁卯年十一月」の「同廿三日」条269に一点、同じく「同廿六日」条272に二点、同じく「十二月中」の「同二日」条278に五点の計八点の文書が収載されている。

このうち一点の文書の年代が明らかであり、Hの年・月の特定に有効である。

Hに収載されている文書の年代に注目すると、表II『山陵取調巡廻日記』収載文書一覽にみえる通り、「慶応三丁卯年」「十一月」の「同二日」条278のaに「慶応三卯年十一月三十日」、dに「卯十二月」とある。これからすると、Hが慶応三年十一月・十二月のものであることが考えられる。そしてこのことは、Hの「十一月」が三十日の記述（「同晦日」）まであり大の月であることと、慶応三年の十一月が大の月であることとは矛盾しない。

右により、Hが慶応三年十一月十六日から同年十二月十一日までのものであることがわかる。

## おわりに

これまでに述べてきた所に拠って、『日記』のA～Fの各部分の年・月をまとめると、次の通りである。

- A 1～42 慶応二年十月三日～十一月十四日
- B 43～55 慶応三年三月七日～十九日
- C 56～83 慶応二年十一月十五日～十二月十一日

D	84	未詳
E	85 94	未詳
F	95 108	明治元年六月二日～十七日
G	109 261	明治元年七月二十五日～十二月二十九日
H	262 288	慶応三年十一月十六日～十二月十一日

これからすると、A↓C↓B↓H↓F↓Gが『日記』の原本の本来の順序と考えることができる。なおD・Eと先に述べた〔錯綜部分〕は年代が未詳である。

今後「文久の修陵」研究のための重要な史料として『日記』の価値が認められ、本稿で見た『日記』について残された若干の課題も含めて、『日記』が「文久の修陵」の動向のなかに位置付けられることを期待したい。

註

- (1) 拙著『幕末・明治期の陵墓』（平成九年、吉川弘文館）表2「『文久の修陵』の期日」四十七～五十頁。
- (2) ただしこの内Aの「十月中」の「同十二日」条10の後に「同十一日」条11が続くのは、日付の流れからすると矛盾する。しかし、この「同十一日」条11には「明十四日五ツ時出立ニテ」（傍点引用者）とあり、「同十一日」とあるのは「同十三日」の誤りと思われる。本稿ではこの「同十一日」条11については「同十三日」と解すことにしたい。
- (3) 『明治天皇紀』第一（昭和四十三年、吉川弘文館）四七九頁。
- (4) 『羽曳野市史』第五卷史料編三（昭和五十八年、羽曳野市）六八四～五頁。
- (5) 『羽曳野市史』第五卷史料編三 六八五頁。
- (6) 『明治天皇紀』第一、八一五頁。
- (7) 『明治天皇紀』第一、八一七頁。
- (8) 『明治天皇紀』第一、八〇三頁。

(9) 『明治天皇紀』第一、九三五頁。

本論文は、平成十一年度文部省科学研究費補助金(基盤研究C)「幕末・明治史のなかの『陵墓』」(研究代表者 外池昇)の成果の一部である。

表I 『山陵取調巡廻日記』の日付の表記

番号	『日記』の日付表記	東大史料本の外題	区分
11	十月中	第一冊	A
10	三日	慶応二年	
9	四日		
8	同五日		
7	同六日		
6	同七日		
5	同八日		
4	同九日		
3	同十日		
2	同十一日		
1	同十二日		
	(十三日)		
26	同十四日		
25	同十五日		
24	同十六日		
23	同十七日		
22	同十八日		
21	同十九日		
20	同二十日		
19	同廿一日		
18	同廿二日		
17	同廿三日		
16	同廿四日		
15	同廿五日		
14	同廿六日		
13	同廿七日		
12	同廿八日		
40	同廿九日		
39	同晦日		
38	十一月中		
37	同朔日		
36	同二日		
35	同三日		
34	同四日		
33	同五日		
32	同六日		
31	同七日		
30	同八日		
29	同九日		
28	同十日		
27	同十一日		
	同十二日		

59	58	57	56		55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43		42	41	
同十八日	同十七日	同十六日	同十五日		同十九日	同十五日	同十七日	同十六日	同十五日	同十四日	同十三日	同十二日	同十一日	同十日	同九日	同八日	同七日		同十四日	同十三日	
														第二冊 慶応二年 全四年							
C																		B			
79	78	77	76	75	74	73	72		71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	
同八日	同七日	同六日	同五日	同四日	同三日	同二日	同朔日	十二月中	同晦日	同廿九日	同廿八日	同廿七日	同廿六日	同廿五日	同廿四日	同廿三日	同廿二日	同廿一日	同廿日	同十九日	
95				94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84		83	82	81	80		
六月二日	〔錯綜部分〕			七月五日	七月四日	六月廿八日	七月三日	六月廿九日	六月廿日	六月十七日	六月十二日	六月六日	六月四日	同廿日		同十一日	同十日	同九日	同八日		
														第三冊 慶応四年							
F														E	D						

小林仙三著『山陵取調巡廻日記』の各日条の年・月の確定

114	113	112	111	110		109		108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96
八月朔日	同廿九日	同廿八日	同廿七日	同廿六日	廿五日	慶応四年辰七月		同十七日	同十四日	同十三日	同十二日	同十一日	同十日	同九日	同八日	同七日	同六日	同五日	四日	三日
G																				
135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115
同廿二日	同廿一日	同廿日	同十九日	同十八日	同十七日	同十六日	同十五日	同十四日	同十三日	同十二日	同十一日	同十日	同九日	同八日	同七日	同六日	同五日	同四日	同三日	同二日
154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144											143 142 141 140 139 138 137 136									
同十一日	同十日	同九日	同八日	同七日	同六日	同五日	同四日	同三日	同二日	朔日	九月中	同三十日	同廿九日	同廿八日	同廿七日	同廿六日	同廿五日	同廿四日	同廿三日	
											第四冊 慶応四年									

174 173      172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155

同  
二  
日  
朔  
日  
十  
月  
中  
同  
廿  
九  
日  
同  
廿  
八  
日  
同  
廿  
七  
日  
同  
廿  
六  
日  
同  
廿  
五  
日  
同  
廿  
四  
日  
同  
廿  
三  
日  
同  
廿  
二  
日  
同  
廿  
一  
日  
同  
廿  
日  
同  
十  
九  
日  
同  
十  
八  
日  
同  
十  
七  
日  
同  
十  
六  
日  
同  
十  
五  
日  
同  
十  
四  
日  
同  
十  
三  
日  
同  
十  
二  
日

195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175

同  
廿  
二  
日  
同  
廿  
一  
日  
同  
廿  
日  
同  
十  
九  
日  
同  
十  
八  
日  
同  
十  
七  
日  
同  
十  
六  
日  
同  
十  
五  
日  
同  
十  
四  
日  
同  
十  
三  
日  
同  
十  
二  
日  
同  
十  
一  
日  
同  
十  
日  
同  
九  
日  
同  
八  
日  
同  
七  
日  
同  
七  
日  
同  
六  
日  
同  
五  
日  
同  
四  
日  
同  
三  
日

215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203      202 201 200 199 198 197 196

同  
十  
三  
日  
同  
十  
二  
日  
同  
十  
一  
日  
同  
十  
日  
同  
九  
日  
同  
八  
日  
同  
七  
日  
同  
六  
日  
同  
五  
日  
同  
四  
日  
同  
三  
日  
同  
二  
日  
同  
朔  
日  
十  
一  
月  
中  
同  
晦  
日  
同  
廿  
九  
日  
同  
廿  
七  
日  
同  
廿  
六  
日  
同  
廿  
五  
日  
同  
廿  
四  
日  
同  
廿  
三  
日



小林仙三著『山陵取調巡廻日記』の各日条の年・月の確定

235	234	233	232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216																					
同三日	同二月	同朔日	十二月中	同晦日	同廿九日	同廿八日	同廿七日	同廿六日	同廿五日	同廿四日	同廿三日	同廿二日	同廿一日	同廿日	同十九日	同十八日	同十七日	同十六日	同十五日	同十四日				
256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236				
同廿四日	同廿三日	同廿二日	同廿一日	同廿日	同十九日	同十八日	同十七日	同十六日	同十五日	同十四日	同十三日	同十二日	同十一日	同十日	同九日	同八日	同七日	同六日	同五日	同四日				
275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262														261 260 259 258 257										
同廿九日	同廿八日	同廿七日	同廿六日	同廿五日	同廿四日	同廿三日	同廿二日	同廿一日	同廿日	同十九日	同十八日	同十七日	十一月同十六日	慶応三丁卯年							同廿五日			
														同廿九日	同廿八日	同廿七日	同廿六日	同廿五日						

表II 『山陵取調巡廻日記』 収載文書一覽

番号	6	7	32	33
日付の表記	〔十月中〕 同八日	〔十月中〕 同九日	〔十一月中〕 同四日	〔十一月中〕 同五日
記号	a	c b a	a	a
文書の年代・内容(差出人↓宛名)	慶応二年寅年「開化陵守戸仰付につき御礼ならびに和州・河州御陵修補普請受負願」(御用達奈良大和屋三郎兵衛↓山陵御役所御役人衆中様) 慶応二寅年十月「開化陵諸木植付につき願」(奈良大和屋三郎兵衛↓山陵御役所御役人衆中様) 慶応二寅年十月「垂仁・成務・孝謙・神功皇后・安康・平城陵普請御用仰付られたきにつき願」(和州添下郡新超昇寺村長役戸尾善左衛門↓御陵御普請掛り御役人衆様)	寅十月「聖武陵大風にて伽藍大破引移し見積書差出し口上書」(佐保山眉間寺↓戸田大和守様御用人中) 寅十月「神門の鍵長役板倉主殿へ渡すにつき口上書」(佐保山眉間寺↓宛名欠) 丑七月「眉間寺聖武陵長役に預けられたきにつき口上覚」(佐保山眉間寺↓宛名欠)	十月「和泉国三陵戸田大和守方へ渡すにつき御達書写」(差出人・宛名欠)	慶応二年寅年十一月「御陵造営入費の内へ50両差加へたきにつき申上」(和州南都水門村孝太郎↓山陵御役所御役人中様)
A				

279	278	277	276	
同 二 日	同 二 日	同 朔 日	十二 月 中  同 晦 日	
284	283	282	281	280
同 七 日	同 六 日	同 五 日	同 四 日	同 三 日
288	287	286	285	
同 十 一 日	同 十 日	同 九 日	同 八 日	

39	(十一月) 同十一日	a	慶応二年十一月「孝照・孝安・斉明・角刺・岡宮陵普請請負たきにつき願」(小堀数馬御代官所和州葛上郡御所町米田新五左衛門↓山陵御用掛り御役人中様)
46	同十日	a	三月十日「六条中納言滞在につき覚」(六條殿加番方↓宛名欠)
55	同十九日	a	十一月十四日「箸御陵山内の雑人石塔婆・石仏等の取払いを御達成し下されたく口上覚」(西村甚左衛門↓宛名欠)
56	同十五日	a	慶応二寅年十一月「神武陵拝所一ノ鳥居欠損並びに同所垣短尺のため狐狸打越相穢につき届」(神武陵長役村島伊輔・守戸惣代辻本善四郎・高岡興兵衛・山田作次郎↓戸田大和守様・山陵御用御役人中様)
		b	慶応二寅年十一月「和泉国御陵御用達・役柄等の儀並びに次三郎・惣三郎御陵掛り役に仰つけられたきにつき願」(泉州大鳥郡上石津村治三郎、惣三郎、長・守戸惣代島田三郎兵衛・川上雅太郎↓御陵御役所様)
		c	慶応二寅年十一月十三日「古市村三郎左衛門安閑陵長役退役跡役の儀につき願」(河州古市郡古市村三郎左衛門・安閑陵長役松倉庄兵衛↓山陵御役所)
60	同十九日	a	慶応二寅年十一月「八月七日大風雨による破損所につき口上」(丹北高鷲原陵守戸惣代正治・同長役吉村丹下↓宛名欠)
		b	慶応二寅年十一月「長役心得仰付け並に河内国十二ヶ帝陵修覆請負度きにつき申上」(河州古市郡碓井村松倉庄兵衛・同国同郡古市村端山太右衛門↓山陵御役所)
		c	慶応二年寅十一月十八日「多病につき允恭陵守戸退役願」(河州志紀郡国府村太吉・允恭陵長役浅野吉右衛門・柏元源兵衛↓山陵御役所)
		d	慶応二寅年十一月「允恭陵守戸退役につき跡役の儀願」(守戸役惣代松尾作左衛門、長役浅野吉左衛門・柏元源兵衛↓山陵御役所)
61	同廿日	a	慶応二年寅十一月「推古陵守戸役勤め居る所更に孝徳陵守戸下知を蒙り辞退申上」(河州石川郡山田村彌惣右衛門↓御懸り御役人中様)

83											84	85
〔十二月中〕 同十一日											七月五日	六月四日
a	b	c	d	e	f	g	h	i	a	a	a	a
慶応二年寅十二月十一日「允恭陵損所につき届」(河州志紀郡国府村浅野吉左衛門↓山陵御役所)	雛型「帝陵の儀につき相達候間役所へ入来ありたく啓上」(戸田大和守内松井良吉・小林仙三↓宛名欠)	雛型「帝陵の儀につき相達候間役所へ罷出るべき事」(戸田大和守内松井良吉・小林仙三↓宛名欠)	十二月「陵普請成功につき取締・長・守戸へ下され銀・米の儀」(差出人↓戸田大和守様)	「規定書」	「制禁之事」	十二月廿五日「出精相勤につき金下されるにつき達」(山田善兵衛殿↓宛名欠)	「陵成功につき長・守戸へ下され銀ならびに国忌祭典・燈明料・年中修理料として請取覚」(小林・松本↓代官小堀数馬殿)	正月廿二日「旧冬長・守戸へ下され銀請取高につき御報」(高津儀一郎↓戸田大和守御内小林仙三様)	六月二日「仁賢陵長役病死につき跡役の儀伺」(石黒亮平・長尾小矢太・斉藤万左衛門・藤尾東作・生星野順平↓小林仙三様・松井良吉様)	七月五日「戸田大和守若年寄御所向御用筋引受山陵奉行は是までの通りにつき来る七日御登営口触」(差出人・宛名欠)	慶応三年卯八月「慶応三年分山陵修理金千両の内五百四十三両三分請取証文」(戸田大和守内小林仙三↓小堀数馬様御役所)	慶応四年四月「御所より御下げの御普請金の内千両請取証文」(戸田大和守家来小林仙三↓會計局御役所)
辰四月「山陵・神武帝山陵御普請また御大葬より御築造まで格段御心配骨折につき賞詞覚」(御营造方共↓中井主水様御支配御大工棟梁近江大掾・肝煎松井七郎)											E	
正月五日「孝元陵守戸役人人撰につき返書」(渡辺丹後守内福島渡理↓戸田大和守御内松井良吉様・小林仙三様)												
慶応四壬辰四月「神武陵祭典に手製の酒献上につき願覚」(和州葛下郡大谷村武烈天皇長役藤村源兵衛↓山陵御奉行所御役人中様)												

102	101	99	96	
同九日	同八日	同六日	三日	
a	b a	d c b a	c b a	i h g f
慶応四年辰六月十日「敏達・用明・孝徳陵大雨にて損所無きにつき申上」(河州石川郡太子村長役山本庄右衛門・春日村長役吉村久兵衛・長役矢野傳右衛門↓山陵御役所)	慶応四年辰六月「孝照・孝安・飯豊陵霖雨にて荒損無きにつき届」(長役津山伊左衛門・米田新五左衛門・赤塚安左衛門↓山陵御掛り小林仙三様)	慶応四年辰六月六日「景行陵慈雨につき荒所届」(景行帝御陵長役和苅洪谷村島岡市郎右衛門↓戸田大和守様御内御役人中様)	慶応四年辰五月十九日「安寧陵大雨にて石垣崩につき願」(和州長役河合庄五郎↓山陵御懸り御役人衆中様)	辰五月「佐保山御陵損所につき届」(南都佐保山別当眉間寺↓山陵御奉行戸田大和守様御用人中様)
	慶応四年辰五月「齊明陵大雨にて崩欠につき届」(守護人惣代岡村平右衛門・長役藤井治左衛門↓御陵御役所様)	慶応四年辰六月六日「懿徳陵大雨にて荒場所無きにつき届」(懿徳天皇長役惣代にて小川平兵衛↓御掛り小林仙三様)	五月「元明陵霖雨にて崩につき届」(長役萩森吉左衛門・荒川民部↓山陵御奉行所御役人衆中)	慶応四年五月「大雨にて垂仁陵・神功陵・成務陵損所出来につき届」(和州長役戸尾善左衛門↓御陵御掛り御役人中様)
		慶応四年辰六月三日「開化陵大雨にても損所無きにつき口上」(率川坂上御陵長格楠三郎兵衛↓山陵御役所御役人中様)	辰五月「元正陵大雨にて崩につき書付」(長役板倉主殿・岡山大膳↓山陵御奉行御役人衆中)	慶応四年辰五月廿一日「大雨にて神武陵損所出来につき届」(和州神武帝長役村島伊輔↓山陵御掛り御役人中様)
				慶応四年辰年「後村上陵強雨・乱水の節難渋につき普請願」(河州錦部郡檜尾山観心寺・最勝院・山陵年番河州東組吉村久兵衛↓山陵御奉行所)
				F

108	107	106	104	
同十七日	同十四日	同十三日	同十一日	
a	a	c b a	a	g f e d c b
<p>慶応四辰年六月「泉涌寺・天智陵普請入用金皆済御下ヶにつき請取」(丸太町堀川西へ入丁請負人柳屋弥兵衛・大宮通出水屋丁下ル請人美濃屋伊三郎↓御陵御普請御用掛り御役人中様)</p>	<p>辰六月「高倉陵土堀去月霖雨にて瓦落雨漏につき届」(清閑寺代入谷近江介↓山陵御奉行所)</p>	<p>六月十五日「大和・摂・河・泉御陵大雨にて御損所普請仕様帳・内訳帳につき伺」(小林仙三↓宛名欠)</p> <p>慶応辰年六月「継体陵大洪水にて損所無きにつき届」(三島藍野長役寺川長兵衛・守戸中邑文五郎↓山陵御掛り御役人中様)</p> <p>慶応四年辰五月晦日「推古陵大雨にて崩落につき届」(河州石川郡山田村長役田中伊右衛門↓山陵御役所)</p>	<p>慶応四年六月十一日「応神陵破損所につき届」(河劬古市郡応神天皇御陵長役年預所↓戸田大和守様御役人中)</p>	<p>慶応四戊辰年六月「孝元陵大雨にて荒所無きにつき届」(百済村長役藤本伊兵衛・石川村守戸役太田弥平次↓宛名欠)</p> <p>「綏靖・孝霊・岡宮陵大雨にて損所無きにつき届」(綏靖天皇長役今井町中澤佐助・岡宮天皇長格守戸吉川八郎兵衛・瀬川市郎兵衛・孝霊天皇長格守戸辰巳権藏中川平藏↓宛名欠)</p> <p>五月十八日「文武陵大雨にて荒所・崩所多分出来につき届」(当年番文武帝御陵長役服部宇之助↓山陵御掛り)</p> <p>慶応四辰年五月廿五日「宣化陵大雨にて引崩れ出来につき届」(今井町長役吉岡新助↓山陵御掛り)</p> <p>慶応四年六月十一日「安閑陵大雨にて崩れにつき届」(河州古市郡古市村守戸惣代小西與次兵衛・長役松倉庄兵衛・河州東組年番春日村長役吉村久兵衛↓山陵御掛り)</p> <p>慶応四年辰六月十一日「安閑陵守戸与次兵衛老年のため悴兼助へ相統致したきにつき願」(河州古市郡古市村守戸小西与次兵衛・同人後見人父與市・長役松倉庄兵衛・河州東組年番春日村長役吉村久兵衛↓山陵御奉行所様)</p>

278		272		269
同二日 〔慶応三丁卯 年十二月中〕		同廿六日 〔慶応三丁卯 年十一月〕		同廿三日 〔慶応三丁卯 年十一月〕
e	d	c	b	a
十一月廿八日「安寧陵長格守戸仰付につき返書」(福地文助↓小林仙三様・松井良吉様)		卯十二月「組合年番の定目覚」	十一月廿三日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月十六日「山陵長・守戸苗字帯刀につき達」(差出人欠↓戸田大和守)
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月晦日「大和国長・守戸組合内に行事相立につき廻達の覚」(戸田大和守小林仙三↓宛名欠)	十一月廿一日「倭迹々姫墓長役苗字帯刀につき返書」(植田順平↓小林仙三様・松井良吉様)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	
十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)		十一月廿日「長・守戸身分達の呼出につき啓上」(戸田大和守内松本鎮太郎↓中条良蔵様・羽田半之丞様)	十一月廿三日「長・守戸人撰につき返書」(島甚右衛門・田中織右衛門↓小林・松井兩人)	